

今回の旅仲間の友人と待ち合わせ。やってきた友人は会つたり、「風邪ひいて調子悪い」と吐かす。そんな体調なのに一昨日も昨日も呑んでたとか、腕時計が突然に壊れて妹のを借りてきたとか。だから、友達の薬剤師からビタミン剤と炭疽菌用の薬を貰ってきたと言つ。炭疽菌用の薬？ 塩酸シプロフロキサシン？ 何なんだよ、おい。実は今日は聖書ではノアの大洪水が起きた日。不安になつてきた。思い残す事がないようにと昨夜、好物の天麩羅を食べ、今朝はお気入りのキュアーのCDを聴いてきたのが本當に食い納めと聴き納めになるんじゃないだろうな。万が一を考えて用意してある遺書が目の目を見る事になると真剣に考えると、もう少し文面を変えた方が良かったかと思つ。無事、帰国したら書き直す事にしよう。幼少からの旧友で、かつてニューヨークで生活をともにしたヌイグルミのスヌーピーの赤い首輪を靴に付けてきたし、大切な人の写真も胸に入れてあるので、大丈夫、大丈夫。

成田に向かう途中、海外に行く実感は湧いて来ない。荷物がちよつとした肩掛け鞆一つだから。空港で色々と手続きが始まれば実感も湧くだろうと思つたが、着いても変わらない。友人は「血がたぎってきた」と興奮してる様子だったけど、風邪薬の影響でトイレが近いと言つので、「膀胱がたぎってんじゃないの」と言つ

てやる。自分は血も膀胱もたぎらない。これって、やっぱり精神的に何らかの障害でもあるのか。我ながら損な性格の様な気がする。

米国同時多発テロの影響で空港の警戒は厳しい。軍事マニアの友人は空港内の警官の着ている防弾チョッキがライフル弾も防げるものだと指摘する。ちよつと見ただけで、何で、そんな事まで分かるんだ、こいつは……と感心半分呆れ半分。飛行機に乗り込むまでのチェックでは、くすぐったがりの自分は困つた。ボディチェックで男に脚を撫でられて、ソクソク感じちゃう。「ひゃあっ！」などと妙な声を上げないように我慢する。その後は靴を脱がされてチェックされる。臭くないかと変な事が心配になる。

飛行機に乗り込み、これから約十二時間の監禁状態。暫く経つて隣の席の友人が唐突に「我慢できない」と言い出した。トイレか？ それとも、まさか吐くのか？ と思えば、「あゆ、聴く」と言つて徐に浜崎あゆみのCDを取り出した。彼は軍事マニアで、あゆマニアなのだ。安心半分呆れ半分。

エコノミーの座席は狭く、左は風邪をひいた友人、右は咳を繰り返して葛根湯を飲んでる赤の他人という芳しくない環境の中やる事はない。ただ座っているだけなのに、まるで食肉用の家畜みたいに定期的に食事が提供される。フォアグラにでもなった気分。日本発の飛行機だから機内食には茶そばが付いてくる。これが地元の蕎麦屋より美味いから厭になる。あの蕎麦屋は一体、

何なんだ？ 機内が砂漠なみに乾燥しているからか、オレンジジュースが異常に美味い。狭い座席に押し込まれた十二時間の飛行では、読書や執筆も続かず、取り留めない妄想ばかり。ケニー・Gやシールの曲が頭の中を流れるのはいい。何故に小学生の頃に聴いていたプロレスラーのテーマ曲まで流れてくるんだ？ ちょっと公にはしたくない非道徳的だったり特定個人的だったりする。十二時間の妄想を過ぎて、飛行機はアトランタに無事に着陸した。

入国審査 疚しいところはない。出入国記録書類の裏に書かれた項目にも当然ながら該当しない。大体、「今までに、あるいは現在スパイ行為サポーター、テロリスト活動もしくは集団虐殺に従事、参加したことがありますか、あるいはしていますか？」などと真面目に訊かれると相当に違和感がある。しかし、戦争に参加して中国人や朝鮮人を殺した日本人の場合、どう答えるのだろうか。白人の職員に、「前にアメリカに来た事は？」と訊かれ、「はい」と答えた。以前に住んでいたから。その答えの後、職員が自分のパスポートをべらべら捲っている。どうも以前の入国記録がないかと探している様なので、自分は急いで、「二十年前です」と付け加えた。それを聞いて彼は「小さい頃だね」と言って納得したように頷く。クリアらしい。「ありがとう」と言って安心して歩き出したら、いきなり後ろから「ヘイ！」と呼び止められた。何かまじい事でも？ と不安になって振り返れば、カウンターに自分のパスポートと航空券を置いたままだった。情けなさに苦笑いして

受け取る。上手くこなしたつもりだったのに、とんだ詰めめのだ。こう見えて、やはり緊張してららしい。友人にも笑われる。やれやれ。気をつけないと。

アトランタでの国内線への乗り継ぎに際しては、成田とは比較にならない警戒度。迷彩服の州兵がライフルを肩に下げて歩いている。成田では引つかからなかった自分が金属探知機に感知され、横に連れ出された。鍵もコインも腕時計も外していたのだが、上着のポケットに入れた手袋に着いた金具が反応したらしいと判明。やはり成田とは感知レベルが違う。これだけ嚴重だと事件は起きないだろうと安心できる。

飛行機に乗る前に空港内のトイレへ。小便器の位置が高い。欧米人仕様。辛うじて届いた。もう少し背が低いか脚が短かったら、子ども用になるところだった。

機内に入る順番を待っている間、鞆の中で携帯電話が鳴り始めた。そんな馬鹿な？ どう考えても圏外だ。自分は海外で使える最新の携帯電話は持っていない、と不審に思っ取り出してみて納得した。目覚ましが鳴っていたのだ。アメリカでは午後四時三十分だが、日本では午前六時三十分。今頃、仕事に行く準備中か。

国内線に乗り込み、アトランタを離陸してニューヨークへ向かう。周りには自分達の他に日本人らしき人は見当たらない。窓からの景色は広大、土地が余っているのが分かる。日本であれば家並みの海の筈。飛行中に夕日が沈むのを眺めて、夜のアメリカへ

と着陸体勢に入る。地上は決して明るくない。見渡すばかりの黒い大地に点在する街の光がシナプスの様に鈍い金色に輝いている。世界最大の文明国の夜景が脳神経を想起させるといふのは意味深げで面白い。強大な国家アメリカへの憧憬と劣等感が緋い混ぜになつた感情を持つて、色々と考えながらそれを眺める。

ラガーディア空港に着陸。タクシーでホテルへ直行する。目的地のニューヨークに遂に到着しても、海外に来たという実感とは違つ何かを感じる。実感はあるのだが、友達の様な興奮とは違つ何かだ。広い道幅、茶系の重厚なビル、その上に人工物の様に光っている月。そう、作り物の様で人間臭さを感じられない。多分、それは人間云々と言つより、日本の町並みと人々に慣れ切っているから、それに当て嵌まらない情景に違和感を感じるのだらう。映画『バットマン』の舞台であるゴッサム・シティそのものの光景なのが、余計にそう思わせるのかも知れない。勿論、ゴッサムはニューヨークの別名で、ここをモデルにしているのだから当然なのだが、そんな事に妙な感慨を感じる。ニューヨークというよりもゴッサム・シティという架空の街に来たみたいない気分だ。

ブロードウェイの辺り、タイムズ・スクエアのすぐ近くにあるエジソン・ホテルに着いてチェックイン。夕食を食べるところだが、機内で家畜の様に食わされたのと十二時間にも及ぶ飛行機による疲労で食欲が湧かない。友人とも意見が一致して、飯も食わずに寝る事にした。十二時間のエコノミーに耐え忍んだ後、ベッ

ドで身体を思い切り伸ばして寝られるこの幸せよ。寝るは極楽。これは万国共通の真理だ。

ニューヨーク、最初の夜。おやすみ。

\$ ニューヨーク徘徊 第二日

七時三十分起床。昨夜は疲れて風呂にも入らず寝たので、起きながらシャワーを浴びる。快感。朝食はホテルのカフェで、コーヒーとオレンジジュースとシリアルとトースト二枚。やはりオレンジジュースが美味い。機内でなくても美味しいという事は、物が違つのか。値段は七ドル、即ち約千円弱なので大して安くもない。テレビでは、ソルトレーク・オリンピックのフィギュアスケートのスキャンダルや死体をそのままにしていた火葬場のニュースなどを放送している。

行き当たりばつたり旅行で昨夜のホテルしか予約していなかったのだが、悪くないホテルなので、今日と明日も連泊する事にしてフロントで友人が手続きを済ませ、早速、外出する。

ニューヨークの朝。天気は良くて、それほど寒くもなく観光日和。道幅は広く、電線も街路樹もなく、ネオン広告も殆どなく、摩天楼の高層ビルはどれも古びて茶色っぽく重厚感がある。デカデカと貼られたペシのポスターのプリントニー・スピアーズの弾けた笑顔がやたらと可愛い。ちなみにプリントニーは日本の浜崎

あゆみみたいな超人気女性歌手だ。勿論、浜崎あゆみよりも上手い。歩行者は関西人の様に全く信号を守る気がなく、真面目に信号待ちをしている自分が酷く馬鹿に思えてくる。

地下鉄に乗る為にタイムズ・スクエア(42nd ストリート)駅に向かい、一日乗り放題のメトロカードを自販機で買う事に。タッチパネル式自販機には日本語の説明画面まであるのには驚いた。クレジットカードでの支払いを選んだ時、連れの友人が急に慌て出した。「カードがない!」。おいおい、初日から問題発生か? ホテルのフロントで連泊の手続きをした時かとも思い出して、ホテルへ戻る。有難い事に思った通りでホテルのフロントからカードを受け取り、再び駅へ。メトロカードを買って、いざ改札のスリットを通して進もうとすると、進めない。反応しなかったらしい。三回目で漸く反応して改札を抜けた。いい感じはしないが、慣れるしかなさそうだ。

地下鉄の改札もホームも車両も余計なものは殆どない。無粋で殺風景というかプラグマティックというか。広告のポスターも少ないし、キオスクの様な売店もないし、自販機もない。椅子がプラスチック製で冷たく硬いのは二十年前と変わらないが、壁面を埋め尽くしていた落書きがなくなったのは大きな違いだ。治安が良くなったんだと安心しつつ、昔の汚さが懐かしい気もする。それはともかく、時刻表も路線図もホームには見当たらない。別に時間の制約がある訳ではないので、さほど困りはしないが。

チャンバース・ストリート駅で下車してグラウンド・ゼロ、即ち世界貿易センター・ビル跡地へ。今回の旅行の主目的の一つだ。近づくに従って工事音が聞こえてくる。目の前の高層ビルに巨大な星条旗が掛けてあるのが見えた。その前、林立する摩天楼の中にぼっかりと開いた空間、それがグラウンド・ゼロだった。未だ工事中で、周囲は壁に囲まれて、それほど中は見えない。だが、離れて見ただけでも、ここにあの百十階建ての超高層ビル、いみじくも自分と同じ年だった世界貿易センター・ビルが建っていたとは思えないほどに跡形もない。テレビ映像で見た様に縦に崩壊したので、周囲のビルは倒壊を免れていただけに元から何もなかったかの様に見える。今朝は雲一つない青空で、やたらと空が広く感じられた。見上げれば、残った高層ビルの尖塔が青い空を周りに突き刺すかの様に囲んでいる。訪れている人は多い。しかし、笑っている人や好奇心を示して写真を撮っている人の存在に疑問を持たざるを得ない。

テロが起きたのを新聞で知った時、「やってくれた」と自分は思った。誤解を恐れずに言えば、或る種、喜んでくれた。かつて日本で地下鉄サリン事件が起きた時にも同じ感情を持った。テロに賛同しているのではなく、それによって一般の国民に見逃されている大事な問題が強烈に再認識されるからだ。残念ながら、大多数の人々は痛みを伴わないと世界の問題を自分の問題として考えない。だからと言って多数の人々が死んでいいものでもない。ど

んなに衝撃的で映画的事件だったとしても、その為に多くの人が死んでいる。しかもタイタニック沈没の様な過去の話ではなく、僅かに半年程度前の事件なのだ。もつと態度を考えてほしい。この様な状態でいる限り、問題は解決しないのだろう。残念でならなかった。

次に、友人の希望で自由の女神に行く事にする。グラウンド・ゼロからトリニティー教会の前を通り、フェリー乗り場のあるパツテリー・パークまで歩いた。途中、向こうから歩いてきた金髪の女の子が海豚の玩具を落としたので拾ってあげたら、恥ずかしそうに笑った。何故か、そんな事が嬉しい。フェリーのチケット売り場の注意書きを見て、友人がショックを受けた様に言った。「えっ！ ナイフ持ってたじゃないの？」って。おい、持つてんのかよ、お前。という訳で、今日は諦めて別の場所に行く事にする。友人は不満そうだった。自分は、グラウンド・ゼロの海豚の女の子だけで充分だった。後から考えれば、多分、ナイフを預かってもらえたのだろうが、そんな事まで頭は働かなかった。やはり二人とも変だった。

そこから歩いて、友人が行きたがっているニューヨーク証券取引所、ウォール・ストリート、連邦準備銀行、といったアメリカ経済の中心地を見て回る。ところが、全て保安上の理由で見学禁止。ガイドブックは当てにならない友人は不満たらたら。可哀想に思いつつも、こればかりはどうにもならない。観光客の為に国

家経済を犠牲にできないのは当然至極だ。

すっかり意気消沈した友人と共に一先ずホテルに戻り、彼は無用の長物のナイフを、自分も余計な荷物を部屋に置き、午後は、どこかで昼食を取ってから、エンパイアステート・ビルへ行く事に。街中は、どこもかしこも星条旗が掲げられ、「団結しよう」といった趣旨のポスターが貼られている。あれだけの事件があったのだから気持ちは理解できるが、外国人から見ると少ししつこい。日本人は愛国心に拒否反応を持つように教育されているからなのか。どうも人通りが少ないのも気になる。今日は月曜なのに。皆、仕事でオフィスの中なのか。

昼食はエンパイアステート・ビル近くのサンドイッチ屋で。店の奥で最初にサンドを注文して、値段を書いた紙を受け取ってレジで支払い。出来上がったものを受け取って自分で自由に席に着く。ツナやレタスを挟んだ約五ドル（七百元）のサンドイッチ二切れは、一切れが掌より大きく、パンより具の方が分厚い。これが、結構、美味い。オレンジジュースも、やはり美味い。日本と違って濃縮果汁還元ではないからではないかと友人が言った。彼は時差ボケが未だに治らないらしく、自分がペロリと食べた二切れを食べきれずに残してしまった。ちなみに今は、日本時間ならば午前三時。丁度、気持ち良く熟睡している時間帯だ。

店内にはビリー・ジョエルの『ピアノマン』が流れている。自分達以外にいた客は若い女性二人と家族連れ五人だったが、この

家族連れ（の娘がナタリー・ポートマン（『レオン』）や『エピソード1』で有名な女優）に似て、可愛い。アメリカは、あちこちに美人がいる。日本人の価値基準が欧米の顔を基礎にしているからだろうが、他人を見ているだけで嬉しくなってしまう街とは何とも贅沢な環境だ。

満腹になったところで店を出た自分達は、大声で意味不明な事を叫びながら歩いている中年男性に驚かされながらもエンパイアステート・ビルへ向かった。予想通り、ED確認や金属探知機を通り抜けてから中に入る。八十六階の展望台に上がる為の料金には自分に無関係なシニア料金もあったが、それは六十二歳以上だった。日本ならば、高齢者は六十歳や六十五歳が基準線なのに、よりにもよって六十二という中途半端な数字は何故なのか。展望台から見えるニューヨークの眺めは、東京タワーから見える東京の眺めとは全く違う。計画的都市設計で暮盤の目に配された高層ビルは褐色で重厚なものが多く、道幅が広いので密集感もなければ景観を害する悪趣味なネオン広告もない。何よりも地平線が見える。東京であれば、見渡す限り建物立ち並んで地面は全くと言っていいほど見えないのに、広大なアメリカの大都市ニューヨークは地平線が見えるのだ。これには友人も驚嘆していた。自分分はふと、こんなに空間の広い街では、本当にバットマンがいたら、漫画でやっているようにビルとビルの間をロープで飛んでいくのは無理なんじゃ、と思った。

エンパイアステートから下りた自分達は、友人の希望で国連本部に向かったものの、ここも中に入らず、遂に諦めモードに入りつつある彼を連れて、自分は勝手に歩き出した。徘徊の本領発揮とでも言おうか。職場が川辺にあるのでニューヨークの川が見たくてイーストリバー近くの道を北上したものの、自動車専用道路に阻まれて川辺には行けなかった。クイーンズボロー・ブリッジまで来てやむなく諦めて左折し、有名な高級デパートのブルーミングデールズに立ち寄りつつ、セントラルパークへと向かう。セントラルパーク前に停まった沢山の馬車と映画でしか見ない馬鹿みたいに長大なリムジンを横目に左折し、CD屋を物色し、道端の売店で懐かしのチョコバー、ミルクウェイを買った。スニッカーズに似たそれは、幼い時にM&Mチョコと共に随分と食べた親しみあるお菓子のだが、残念にも日本には上陸せず、食べたくても食べられないでいたのだ。今回の訪米に際しては必ずや買って食すべし、と固く誓っていただけ、こつてりしたアメリカンな重たい甘さを味わった時は、もう一人で悦に入ってしまった。

大目的を果たした達成感に包まれつつ、脚も疲れたのでホテルに帰還する。明日の予定を考えるのにガイドブックを捲っていて、知られざる事実に気付いた。今日は祝日だった。「大統領の日」だそう。道理で人が少なかったり店が閉まっていたりする訳である。友人は疲れ果てたらしくベッド上でのびていたが、家に電話する必要があった自分はプリペイドカードを買いにホテルの売店に行

く事にする。が、売店の場所を見逃して、探すのも聞くのも面倒臭くなり、折角だから一人で外を少し歩いてみようと思いついた。夕方のブロードウェイをぶらぶらしていると、土産屋の大きな窓越しに燦然と店内に掛けられた愛するバットマンのＴシャツに気付き、店に入る。先ず職場の先輩に頼まれていた星条旗グッズを買い、それからレジで店員に「あのバットマンのＴシャツが欲しい」と言った。「サイズは？」と聞かれ、「SかM」と答える。アメリカン・サイズはデカイ。続けて「誰が着るの？」と聞かれ、「自分が」と答えたら、少し怪訝そうな顔をした。そんなに変な事か？バットマンはアメリカでは老若男女に愛されるヒーローじゃないか、と思いつつ店員に促されるまま後についていって理由が判明した。子ども服だった。それではSやMのサイズでは着られない。体に合わせてもらい、「似合っよ」などとお世辞を言われて喜びつつLサイズの子ども服Ｔシャツを購入。いいじゃないか。好きなんだから。

それから、またぶらぶらして今度はバージン・メガストア・タイムズ・スクエアに入った。言わずと知れたCD屋だ。当然ながら洋楽ばかり並んでいる。と言つた、こちらではこれが邦楽なのだが。洋楽好きの自分は嬉しくて堪らない。日本では銀座や渋谷の大きな店でも見つかからないアルバムが、さりと置いてある。ビデオのコーナーに並ぶポケモンやセーラムーンに妙な気分になりながらも、自分はJ・J・ケールやヴァン・モリソンのCD

を手にして、真剣に悩み始めた。欲しい物が多すぎて、どうしていいやら分からない。全て買ったら相当の金額になってしまふ。拳句、冷静になつて考え直してからにしよう、今夜は何も買わずに撤退する事に決めた。

幸せ気分に戻り、ホテル内の売店を見つけて電話用のカードを買つと、早速、ロビーの公衆電話から電話した。部屋から国際電話をかけた場合はサービスクを加算されるからだ。アメリカのカードは電話機に挿入するのではなく、各カードに記載された固有の番号を押す事で通話できる。国が違えば様々な事が違ふものだ。

その後、友人とホテル内のレストランで夕食にした。フルコースを頼んだら胃袋が破裂するのは目に見えているので、パドワイザーを手始め、前菜に生ハムとメロン、メインにグリルド・サーモンを注文した。案の定、量は多い。サーモンに至つては一見すると倍程度の面積だが、実は厚みも倍あつて、結局、日本の四倍に近いものがあつた。お世辞にも褒められない味だが、別に期待もしていないので構わない。満腹だよ、と思いつつも、店員に「デザートは？」と訊かれて、「チョコレート・ケーキ」と頼んでしまふ。久しぶりにアメリカの乱暴なまでに甘いケーキが食べたくなつたからである。確かに甘かったが、予想したほどではなかつた。今回の旅行で食べたいと思つていた物は、ミルク・ウェイを筆頭に、ピザとケーキだったから、これで残るはピザのみとなつた訳だ。

こうして、グラウンド・ゼロとミルキーウェイの一日が終わった。

\$ ニューヨーク徘徊 第三日

昨日、徘徊しすぎたせいか、九時半に起床。当初の計画は観光客が多くてフェリー乗船で待たされるらしい自由の女神に午前中に行くつもりだったが、少し時間が遅いので計画を変更して、自分が幼少時代を過ごした場所を訪れる事にした。

テレビでは飼い犬を叩きのめした女性の裁判について報道している。どうやら毎日、何かの裁判の生中継をしているらしい。裁判社会と言われるアメリカらしい。

昨日と同じ朝食を食べて外出する。やはり、今日は祝日ではないので人通りが多い。街自体が日本と違うだけでなく、歩いていく人々も違う。髪の色や肌の色の話ではなく、皆、颯爽と歩いているのだ。日本では多くの人が悩み事でも抱えているのか下を向いて歩いており、踵を踏み潰して地面を擦る様に歩く若者もいるが、そんなだけだるい輩はニューヨークには見当たらない。踵を踏み潰さないのと言つまでもないが、皆が前を向いて、カッカツと心地好いリズムで歩いている。冬の冷たい空気と相俟って、その引き締まった感じが気持ちいい。この違いは国民性から来るのだろうか。

かつて住んでいた場所はFラインの地下鉄の終点であるヒルサイド駅の筈なのだが、駅の入口に貼られた路線図にはヒルサイドの名前がなかった。Fラインに乗ってクイーンズの方に向かうのは間違いないので、取り敢えず終点のジャマイカ179ストリート駅まで行ってみる事にする。路線が延長していたとしても、一日乗り放題のメトロカードを持っているのだから、戻ればいいだけだ。平日に都心から郊外へと向かう空いた車内で四十分強、電車は目的の地へ着いた。地上へ出て町並みを見た途端、すぐにごこと分かった。覚えていた訳ではなく、事前に親から手に入っていた写真と同じ景色だったからだ。ここまで来ると高層ビルはないので、とにかく空が広い。今回の旅行における自分の最大の目的である場所が目の前にある事もあって、自分は爽快な開放感を味わっていた。

早速、駅から近くのアパート、通称「カメラロット」へと歩き出す。既に建物自体は視界に入っていた。平日の住宅地は人通りも疎らで長閑な空気が漂う。道路を渡り、緩やかな坂を上って左折して、カメラロットの入口があった。知り合いは皆、引越してしまっているので残念ながら中は入れない。一先ず、そこを通り過ぎて、駐車場への入口を探した。以前、駐車場の一部に子ども用のブランコや滑り台が置かれていて、いつも自分はそこで友達と遊んでいたのだ。幼かったから記憶容量が少ないからか、自分はニューヨークに住んでいた当時の事を断片的にしか覚えて



いない。多くは部屋の中とか学校の教室や食堂とか、今更、見る事の難しい場所ばかりで、唯一、期待できるのが、その思い出の遊び場だったのだが、鉄製のゲートが閉められた入口を見つけて中を覗いても、それらしき遊具は一つもなかった。どうやら撤去されてしまったらしい。残念無念と思いつつ、ないものは仕方ないので、付近の写真を何枚か友人に撮ってもらおう。覚えている風景、覚えていない風景、色々あるが、良く言われるように幼少の記憶よりも全体として小さい。写真を撮っていると、向こうから歩いてきた二人の子どもが興味深げな表情をして、通り過ぎてからも振り返って自分達を見ていた。観光客が来る場所ではないからだろう。

来た坂を下りて右に曲がると、懐かしくなった自分はスーパーマーケット「パイオニア」に入った。扉は変に開け辛く、それに出てくる客が自分を妙な顔で見ると、出口専用の自動ドアだった。間抜けと思いつつ、一度、出てから入口専用のドアから入りなす。ここは記憶にある通り、何もかもデカイ。ジュースのペットボトル、ジャムの瓶、そしてアメリカ人の胃袋は異常なのではと思いたくなるほどに巨大な肉の塊。すっかり嬉しくなった自分は友人の存在を無視して嬉々として店内を徘徊し始めた。我ながら普通の観光客じゃない。自分は観光地より、その町の普通の商店を物色したり、道端を歩き回ったり、公園でのんびりしたりしているのが好きだった。

先ず手始めに迷わずチョコバー、ミルクウェイの六本入りバツクを手にする。これを買わずにいられようか。それからは本格的徘徊だ。ポップコーン、キッスチョコ、日本製ラーメン、各種缶詰、そして自分はピーナッツバターの前で立ち止まった。現地校の食堂で食べたピーナッツバター・サンドを思い出す。欲しい。しかし、その隣にずらりと並ぶジャムも捨て難い。パイナップル・ジャムなどの日本で見ない物もあり、特に目を引いたのは右隅にあったスヌーピーが瓶に描かれたジャムだ。欲しい。どれにしようか。だが、ふと思った。これを買おうと瓶入りなので結構、重い荷物になる。そもそも自分は昔ならともかく、今はパンにバターしか塗らない主義なのだ。買っていけば食べるが、何か無駄な気もする。悩んだ末に買わない事にした。昨夜のCD屋と同じ展開だ。ジャムの棚から離れて姪への土産にカードを選んでみると、現地のオバチャンが、「そのコーラ、取って」と頼んできた。丁度、カードを見ていた横の少し高い場所にコーラのペットボトルが置いてあったのだ。それを取ってオバチャンに渡し、「ありがとう」「どういたしまして」の定番の遣り取りを交わす。旅行記用の小さなノートだけで荷物も持たずに郊外のスーパーでうろつく自分は、観光客とは思われない。

最終的にミルクウェイとカード二枚を買う事にしてレジに行くことと思えば、友人の姿がない。彼を無視して夢中で徘徊している自分に付き合っただけでなかったのだらう。悪い事をしたかもし

れない。見つけ出して支払いを終え、今度はきちんと出口専用の自動ドアから店を出た。相当、満足だった。欲を言うならば、残り時間でこの界隈を徘徊しまくりたかったが、それは自分勝手というものだ。

キヤメロットに別れを告げて地下鉄に乗り、世界四大ミュージアムの一つ、メトロポリタン美術館へと向かった。地下鉄を下りて美術館へ歩いている信号待ちの時、左にいた若い女性が、いきなり自分に「今、何時？」と訊いてきた。予想しなかった展開で、相手が好みのタイプの可愛い女性だっただけに、不覚にも自分は動揺してしまい、腕時計は見たものの何一つ言葉を発する事ができない。彼女は「二時五分ね。ありがと」と言つて、早足で去っていった。欧米の人としては小柄で若い頃のウィノナ・ライダー（『シザーハンズ』『リアリティ・バイツ』等）に出演してた有名な知性派女優）を思わせる彼女は黒尽くめの服装で黒い大きな鞆を肩から下げていた。小さくなっていく彼女の背中を見送りつつ思った。勿体ない事した。

正面階段に多くの人々が座り込んでいるメトロポリタン美術館の巨大な建物の前に着いたものの、腹が減った。空きつ腹での芸術鑑賞は戴けないので、友達の同意も得ずに道端のホットドッグの屋台に直行する。昨日から、あちこちで目について気になっていたのだ。「マスタードかケチャップか？」と訊かれて「両方」と答えた。缶飲料と合わせて三ドル（約四百円）は手頃な値段だ。

それを屋台の横の道端に腰掛けて頬張った。実に美味い。日本の軟弱なホットドッグとは違う。流石にニューヨーク名物だけある。同じ様に道端でホットドッグやプレッツェルを食べている少年達がいて、彼らはローラーブレードとキックボードを乐しげに乗りこなしていた。それにしても、連日、天気にも恵まれているのは助かる。雨だしたら徘徊も屋台も辛かった。腹拵えを終え、ごみを角のごみ箱に捨てる。分別にはなっていない。楽でいいが、これで平気なのか少し疑問に思つた。

いざ、メトロポリタン美術館へ入館する。友人が荷物をクロークに預けるのを待っていると、すたすた見知らぬアンチャンが近寄ってきて言った。「君の靴、どこで買ったの？」とは……？「すいません。貴方の言つてる事が分からないんですけど……」と返すと、彼は自分の靴を指差して、また同じ事を訊いてきた。本気で質問しているらしく、「日本で」と答えたら、彼は残念そうな顔をして「ああ……日本が。有難う」と言つて去って行った。何だつたんだ？ 周りの客も自分を見て意外な事が起きたと面白そうに笑った。自分が履いてたブーツを気に入って訊いてきたみたいだが、日本と聞いて残念そうに引き下がるのは、自分が日本人観光客に見えなかったのか。昔、ヒスパニックと間違われた父親と似たり寄ったりだ。やれやれ。

二人で見始めたものの、軍事マニアの友人が兵器・鎧兜の部門に熱心に見入っているのを見て、この巨大な美術館で趣味の違う

二人が共に行動するのは、やはり良くなさそうだと思い、午後五時にロビーで待ち合わせという事にして自由行動にした。自分は二階が上がって十九世紀ヨーロッパ絵画と彫刻の部門から鑑賞を始めた。最初に足が止まったのは、ムンクの名作『吸血鬼』だ。それが手で触れる状態で飾られている。勿論、触ってはいけないし、そのつもりもないが。この他にも、『ゴッホの『糸杉』やスーラの『グランドジャット島の日曜日』の午後の習作』等、目を瞞る作品が並ぶ。各々の絵や彫刻の前では若者が床に座り込んでデッサンをしていた。二十世紀美術の部門では、ダリやキリコの悪夢的な作品の他、一面真っ黒なだけというプリンスのブラック・アルバムのジャケットの様な絵や、日本のPTAが見たら怒り出しそうな女性器を露骨に思わせる奇天烈な人形による作品があった。途中、便意を催した自分は館内のトイレに入って、自分は天下のメトロポリタンのトイレで用を足してるんだあ……などと阿呆な事に感動した。その後、南アジア美術の部門に行くと、客がいない。入ってはいけないのかと不安になったが、そうではないらしく、単に人気がないだけだった。中学時代、アイドルじゃなく仏像の写真集を二十巻も揃えてしまった老けた趣味の持ち主の自分からすれば、全く失礼な話だ。思わず見惚れてしまうガンダーラ美術の彫刻の前に立っているのが自分一人というのは、嬉しいような哀しいような。最も見たかったものを一通り終えると時間は四時半近く、後ろ髪引かれる思いながら鑑賞を切り上げ、大切な

人へ買っていく土産をミュージアム・ショップで選ぶ。買い終えて友人と合流し、自分達は美術館を出て、セントラル・パークを散策してから地下鉄の駅に入った。

今日は駅改札の扉を逆に出ようとして突っかかる愚行を二回もしかかす失態に、我ながら情けなくなる。中々、ニューヨークにはなれない。駅構内のホームのベンチでは一人の白人青年がギターを掻き鳴らしていた。これが上手いのだ。見た目も映画俳優みたいで格好いい。東京辺りでストリート・ミュージシャンを気取っている勘違い野郎とは明らかに違う。豊富なコレクションを誇る美術館を見た帰りの電車を待っている間、こんなものを聴けるとは何と文化的に驚沢な街か。嬉しくなって彼のギターケースに二十五セント硬貨を投げ入れた。

ホテルに戻って一休み。テレビで『バフィー・ザ・バンパイア・スレイヤー』を観てから、夕食の為に外出した。全て友人に任せる事にする。今日は午前中、自分の都合に付き合わせてしまったし、自分で考えるのが面倒なのもあった。彼の選択で手頃な値段のファーストフード系の店に入る。語学力では自分は到底、彼に敵わないので、注文も彼に任せた。見るからに量が多そうだったので、一人分を二人で食べようと考えたのもある。ところが、店員に英語が通じない。スペイン語しか話せないのだ。国際都市であれば、そんな事もある。英語の分かる店員を捕まえて彼は乗り切った。頼んだステーキの量は見た目には多かったものの脂身が

多く、一人でも食べられそうだったが、飲み物がデカイ。友人のコーラはMサイズなのに日本のLサイズ並みで満杯に注がれているのに、店内に栓抜きが見当たらない。店員に訊いたら、「手で開けるんだ」と言う。自分はレスラーじゃない。「開けてくれ」と頼んだら、自分の手から素早く瓶を受け取って、あっさり手で開けてしまった。びっくりしたが、冷静になって見てみれば、瓶の口に螺旋状の溝ができている。本当に手で開ける仕組みになっていたのだ。ちょっと恥ずかしい。

食事を終えて部屋に戻る前、ホテルの売店でプレッツェルとチョコを買う。友達が風呂に入っている間、自分はプレッツェルを齧りながらテレビを観ていた。ニュース番組ではブリトニー・スピアーズを取り上げていた。やはり彼女はアメリカでは大注目の女性アイドル歌手だ。風呂から出た後も、ずっとテレビを観ていた。母親を殺して父親も銃で撃つた少年についての番組だ。街を歩いている限りでは物騒な経験は今のところないが、やはり銃社会の国なのだ。この他、日本にも輸入されているようなコメディ・ドラマの数々に笑い転げたり、日本と違って静かに笑いを誘う系統の多いCMを楽しんだりして一夜が過ぎていった。

こうして、スーパーと美術館を徘徊した一日が終わった。

#### § ニューヨーク徘徊 第四日

三度目の正直とばかりに早起きした自分達は、自由の女神のあるリバティ島へ行くフェリーに乗る為にバッテリー・パークのクリントン砦で券を買い、乗船を待つ列に並んだ。言うまでもなく荷物検査と金属探知機が待っていた。ここではベルトまで外させてから金属探知機を通すのには少し驚かされる。

フェリーが動き出してマンハッタン島から離れた途端、わらわらと乗客の殆どが動き出して船からのマンハッタンの眺めを写真に撮り始めた。どこでも観光客の行動は変わらない。写真、写真、写真。だが、自分は違った。いつ頃からか、自分は旅行に行っても写真を撮らなくなった。今回も、住んでいた場所を友達のカメラで撮ってもらっただけで、それも家族に見せる為に過ぎない。旅行先で写真を撮っても、それを自分が後から見るとはなかった。かつて写真を大量に撮っていた頃の旅行は覚えていないのに、写真撮らなくなつてからの旅行の方は自分の眼だけでなく脳が覚えている気がしたのだ。自分はレンズを通さずに肉眼でマンハッタンを見ながら、少し物足りない気分だった。世界貿易センターの二本の尖塔がないマンハッタンの眺めは、どうしても締まりがなく、グラウンド・ゼロを見に行った時よりも、あのテロを思わせる。自分は、マンハッタンから目を離し、自由の女神の向こうに広がる海や船の手摺りに止まった海鳥を眺めた。それもニューヨークの景色だ。

十五分ほどで船はリバイ島に着いた。棧橋からは自由の女神の後ろ姿が見える。友達は女神像の中の階段を上がって展望室に行くのだと張り切っていた。ところが、ここでもや初日の如き不幸が友人を襲ってしまう。保安上の理由で女神像の中には入れなくなっていたのだ。連日の仕打ちとも言える展開に、遂に友人は不満も露わに「これじゃ、不自由の女神だ」とぼやいた。

いみじくも、その言葉は、自由主義の問題を突く発言だった。所謂、「戦う民主主義」論でも言われるのと同様に、自由を否定する者に対しても社会は自由を認めるのかという問題だ。それは勿論、一介のあゆマニアに過ぎない友人ではなく、アメリカを敵視するテロリストに対しても自由を認めるのかという事である。世界貿易センターの崩壊も痛手だが、自由の女神は歴史浅いアメリカにおける歴史ある象徴であり、アメリカの顔なのだ。万が一、これが破壊されでもすれば、アメリカの面目は丸潰れになる。観光の為に公開する利点と比較するのも馬鹿げているくらいだから止むを得まい。その様な選択をせざるを得ない事自体が、今の欧米的価値観、自由主義と民主主義の限界なのかもしれない。

計画が完全に頓挫した自分達は、大いに時間が余った。自分が明朝早くにアメリカを発つ都合上、今日の午後は街で土産を買い、早めに空港近くのホテルへチェックインする予定なので、午前中一杯を自由の女神で費やす計算だったのだ。どちらにしろフェリーの到着も待たねばならない。自分達は、自由の女神の前を徘徊

した。女神像をデッサンしている中年男性、中華思想の故か妙に傍若無人な中国人グループ、それと対照的におとなしい数名の日本人などが目につく。元来、一ヶ所ではうっと時間を過ごす旅が好きな自分は、女神を見上げたり、女神が見ている眺めを見たりするのは面白かった。眺めはマンハッタンに背中を向けているので、摩天楼一つ見えない海だ。貿易センターの崩壊も、女神は背中に感じただけで見える事はできなかったんだな、と思った。

帰りのフェリーは、心なし行きよりも乗客が多い。傍若無人な中国人や自分達に話しかけてもこない日本人カプルの他、船内で二人で優雅に踊っている幸福な白人カプルがいた。袖に「空中飛行」と漢字で書かれたジャンパーを着た少年もいた。そう言えば、いつだか覚えていないが、多分、エンパイアステートに向かっていた時か、若い黒人男性が背中に「水」とデカく書かれた革ジャンを着て、かつこ良さげに歩いているのを見て苦笑したのを思い出す。彼らにとつては、漢字はエキゾチックでお洒落な魔法文字の如きデザインなのだろう。考えてみれば、彼らから見れば、アルファベットの書かれた服を着ている日本人を見て、同じ違和感を覚えるのかもしれない。

マンハッタン島に戻った自分達は昼食を取る事にする。ニューヨークに来たからには絶対に食べて帰らねばならないと心に決めていたもの、ピザだ。前から自分が語っていた事もあってか友人も乗り気で、本来、余り食事には興味を示さない彼が自らガイド

ブックを見て、行く店を決めていた。自分みたいに無計画に、どこかの店に入ればいいかと思っていたのは違って頼りになる。彼の誘導についていき、途中、ニューヨーク大学を抜けていく。それにしても、どこを歩いていても携帯電話で話している人を殆ど見かけない。日本が「a nation of certifiable mobile-phone freaks (携帯電話気違いの国)」と言われてしまうのも納得する。ちよっとだけ迷いつつ目的の店、「ジョンズ・ピッツェリア」へ到着した。正直に言って、界隈は綺麗とは言い難く、治安も大丈夫なのかと少し不安になる。多分、ブロードウェイに宿泊しているから思うだけで、普通の雑多さなのかもしれない。店に入った自分達は左側半ばの席に着いた。未だ時間が早いらしく、客は他には一見してブルーカラーといった風貌の二組しかない。壁にはびっしりと落書きがされ、雰囲気たつぷりだ。上品さの影も形もない。自分はピザとルートビアを頼んだ。ルートビアは漫画『ピナーッツ』で変装したスヌーピーが何かと注文する飲み物なので飲みたかったのだ。因みに店にはキンビールもあった。世界進出してるんだな、と思いつつも、こんな所でこれを頼む人がいるのか疑問に思う。注文したピザは勿論、二人でMサイズ一枚だ。日本の感覚で頼んだら、とんでもない事になる。案の定、出されたピザは二人で食べるのに十分過ぎる大きさで、実際、少食の自分は半分を食べられずに友人に一切れ食べて貰った。シンプルな具だが、そのシンプルさが美味しい。いつしかお昼時になり、店内

に客が溢れ、遂に入口で待ち始めたので、食べ終わった自分達は勘定を済ませて満足にチップもはずみ、店を出た。これで、ニューヨークでの食の目的は、ほぼ達成した。満足、満足である。

午後は先ず、タイムズ・スクエアにあるインターネット・カフェ、「イージー・エプリシング」へ。自分が年度末の時期に長期休暇を取って海外旅行へ行く事を告げた時、職場の先輩に、中々、海外からメールが送られてくる事はないから、ニューヨークからメールを送ってほしいと言われていたのだ。自販機に友人がカードを挿入して固有番号を取得し、店内にずらりと並んだ八百台のパソコンの中から、一台を選んで席に着いた。旅先からメールする場合の方法を知らない自分は、パソコンに詳しい友人に任せる事にした。英語と言いパソコンと言い、友人に任せつきりとは我ながら情けない。友人がスムーズにホットメールのアドレスを取得し、自分と席を交代した。しかし、このパソコンでは英語表示しかできないので、英語で書くかローマ字で書くかしかない。折角、アメリカから送るのなら英語にしようと考え、自分でも何とか書ける超初心者レベルの英語で職場に送るメールを作成した。とは言え、スベルを友人に確認しながらだ。

件名「ピン・ラディンより」。

「こんにちわ、労働者諸君

これはペンです……失礼、間違えました。このメールはニューヨークから送っています。

私は元気です。女性がとても綺麗です。エキサイティング！  
バイバイ」

我ながら軽薄な内容だなと思いつつも、難しかったり詳しくかったりする内容の文章を英語では書けない。もし書けたとしても受け取った職場の人が読めない。故に仕方ない。その後、友人があの名を騙ってメールを送り、ネットカフェを出た。

ニューヨークでの大方の予定を終えた自分達は、肝心の今夜の宿を決める事にした。自分は明朝六時四十分の飛行機で発つので、空港近くのホテルに泊まりたかった。マンハッタンから三十分程度で行けるとガイドブックには書いてあるが、もしも何かしらの理由で遅れば、乗り継ぎが上手くいかなくなる。そこで、インフォメーションに行って訊いてみて、問題は発覚した。分らないと言った。ここはニューヨーク州で、自分が使うニューアーク空港はニュージャージー州だからである。何たる事か。この自分が地方自治の州境に阻まれるとは何たる皮肉な展開よ。諦めてニューヨークのホテルに泊まるが、直接にニュージャージーに行つて現地でホテルを探すか。このインフォメーションにニュージャージーのインフォメーションの電話番号を聞いて、電話したらどうか、と友人に提案すれば、電話で英語を話す自信はないと言つ。彼にない自信は自分もない。その時、友人がエジソン・ホテルのフロントに訊いてみようかと言つた。それだ。考えるより先ず行動、断られたら別の方法に移ればよい。早速、エジソン・

ホテルに行つて友達がフロントの男性に事情を話すと、フロントは気軽に空港近くのホテルに電話してくれた。一泊約二百ドルの値段に友人は目を丸くしたが、とにかく無事にニューヨークを発ちたい自分に金額の多寡は問題ではない。お前の分も俺が出すから、それに決める」と言い切つて、遂に宿はコートヤード・マリオット・ホテルに決定した。一時はどうなる事やらと思つた状況も、エジソン・ホテルのフロントのお陰で乗り越えられ、友人はフロントの男性とがちり握手して礼を言つた。勿論、自分も笑顔で礼を言つ。礼金でも払いたいくらいの気分だった。

心配がなくなつた自分は、ホテルに行く前に姪への土産を買う事にする。トイザラス・タイムズ・スクエアだ。普通の土産屋に行けばいいのだから、自分はトイザラスが目に入った時から姪への土産とは無関係に入りたいと思つていた。今では日本にも進出しているこの巨大玩具店は、小さな玩具屋に行くだけでも興奮する幼時の自分にとって夢の如き世界だった。まだサンタを信じていた純朴な頃、貰つたプレゼントにトイザラスの値札が付いているのを見つけて、サンタクロースもトイザラスで玩具を揃えているのかと思つたものだ。店内に踏み込むと当然ながらそこは親子連ればかりで、成人男性二人組などいない。そもそも日本人観光客と思しき者がいない。目の前には小さな観覧車が回っている。店内に観覧車が回っているのだから堪らない。懐かしのスター・ウォーズやバットマンの他、今はポケモンやガンダムまであった。

いい年こいて自分は玩具屋を徘徊し、姪への土産を探し回った。二ニューヨークでないと買えず、荷物にもならず、小さな女の子が喜びそうな物というのは案外に難しい。何より日本でも買えそうな物が多い。それだけ両国の交流が行われているという事か。店内は子どもで賑やかこの上ない。時に子どもと逸れた母親の叫びが聞こえたりする。悩んでいる間に自分も友人と逸れたが、先に行ってしまう心配もないので、慌てず二階のキャンディ・コーナーで職場への土産に二十種類の味が楽しめる箱入りジェリー・ピーンズを買った。ジェリー・ピーンズはあのレーガン大統領の好物としても有名だ。わざわざアメリカにまで来て、日本でも買えそうな物を買っていても面白くない。このキャンディ・コーナーには子どもが溢れ、自分が選んでいる時も、小さな子が透明ケースに入った量り売りのジェリー・ピーンズを溢す程にわんさと搦っていった。その後、馬鹿みたいにうるうるし続け、自分は二つのヌイグルミのうちのどちらかまで絞り込んだ。トイザラスのオリジナル・キャラクターである麒麟が自由の女神の格好をしたものが、腹に有名なE・ラブ・NYの四文字が描かれた熊か。そこで自分は友人を見つけ出し、彼の意見を聞いて熊に決めた。一件落着。レジの傍で母親を相手に駄々をこねている金髪の少女の姿に思わず笑ってしまう。どこでも子どもは同じだ。自分勝手なくらいに素直で、そして堪らなく可愛い。

何もかも済んで、いい気分になって店を出た。ホテルに行くに

は少し早かったので、辺りを徘徊する。途中、或るビルの前に妙に人だかりが出来ていて野次馬根性で行ってみた。若い女性の多い群集は皆、ビルの二階の窓ガラス越しに中のスタジオを見上げている。時折、誰かが顔を出すと、凄まじい黄色い歓声が上がった。まるで新宿が渋谷だ。どうやら女性に人気の男性芸能人らしい。自分達は知らない人だったので、撤退した。

そろそろ夕方なので、タクシーを捕まえてホテルに移動する事にする。ところが、タクシーが捕まらない。場所がブロードウェイなのでタクシー自体は沢山走っているのだが、慣れない自分達は、どれが空車か分からない。拳句「Off Duty」のランプがついた休憩中の車に声をかけてしまつて断られる始末だ。あちこち歩いている内に、漸く捕まり、ホテル名を告げてタクシーは走り出した。運転手の無線通信はスペイン語で内容が分からない。大丈夫とは思うが少し不安で、きちんと目的地に向かってるか確かめる為窓の外の風景や進行方向を見ていた。タクシーはニューヨーク空港の方角へ向かい、ハドソン・リバーを渡った。

さよなら、二ニューヨーク。

日も沈んでいく。遂に旅も終わってしまうのかと、何となく寂しい気分になる。日本を出発するまでは面倒な気持ちも混在していたのに、実感も湧かずにいたのに、いざ、離れようとする時、帰りたくない気分になっていた。大概、自分にとって旅とはそういうものだ。



すっかり日も落ちて、タクシーはマリオット・ホテルに到着した。シンプルだったエジソン・ホテルと違った高級感あるロビーに入り、疲れの出でてきた自分達は早速、フロントでチェックインをしようとしたが、そこで問題が発覚。ホテルに予約がされていないらしい。「冗談にもならない展開かという思いが一瞬過ぎたが、タクシーがホテルを間違えただけの事だった。ここはマリオット・ホテルで、自分達が予約しているのはコートヤード・マリオットという同系列の別ホテルなのだそうだ。コートヤードのシャトルバスがこちらに寄って自分達を拾ってくれる事になって一安心。ロビーの椅子にどっかと座ってバスを待った。待たない。更に待った。でも、来ない。大丈夫か。欧米は日本に比べて時間に甘いのだとは思いつつも、三十分が経過して痺れを切らし、友人がフロントに訊きに行く。もうすぐ着くからと言われて十分後、漸くバスが来た。待ちかねた自分達を乗せ、早速、バスはコートヤード・マリオット・ホテル、自分にとってアメリカでの最後の宿に向かった。

到着したコートヤード・マリオットは、高級には変わりないが、先程のマリオットとは違って、よりホテル色の薄いこじんまりした感じだ。フロントの女性が美人で、ただそれだけで自分は気を良くする。ホテル内にはジムまであった。部屋はエジソンの倍はある広さで、大きな机まで備えられている。ホテルの案内に目を通すと、どうもここは仕事関係の旅行者向けらしい。道理でやた

らと大きい机にインターネット接続用の配線まで用意されている訳だと納得する。すっかり夜だったが、自分達に夕食を食べる食欲はなかった。昼食の大きなピザは十二分の量だったし、そこに連日の徘徊の疲れ、そしてホテル探しとホテルの違いの精神的疲労が重なり、とにかく、休みたかったのだ。ゆったりした浴室で思い切りシャワーを浴び終えて、ぐっすり寝たいところだったが、明朝六時四十分の飛行機に搭乗する自分は、余裕を持って一時間以上前には空港に着きたいので、五時が始発のホテル発シャトルバスに乗る為、まともに寝る訳になかった。普段、目覚まし時計が鳴る前に目を覚ます自分でも、旅先で疲労した場合には起きられない事もある。国内旅行の新幹線程度なら乗れなくても構わないが、海外で飛行機に乗る場合は大いに構う大問題だ。

半徹夜を覚悟し、自分は暇潰しにテレビを点けた。

飛行機墜落のニュースをやっていた。

思わずテレビを消した。

複雑な気分で、ニューヨークの徘徊は終わるつもりでいた。

#### \$ ニューヨーク徘徊 第五日

寝ない。寝坊して飛行機に乗り遅れては困るからだ。

とは言え、起きていても、する事がない。暫くの間は、友人と話をしたりしていたが、彼も疲れの余り寝てしまった。自宅にい

る時であれば、CDを聴いたり、本を読んだり、パソコンを弄ってホームページを更新したりできるが、ここにはCDも本もパソコンも持って来ていない。取り留めない思考の海を徘徊しつつ、時が過ぎるのを待った。

何もする事がないので、これから日本に帰ろうという時に、ニューヨークのガイドブックを読み始める。帰りは一人なので空港での手続きや搭乗の手順を再確認していた時、不安な一文を見つけてしまった。

「帰国便の七十二時間前までに予約した便に乗ることを航空会社に連絡すること。」

初めて知った。当然、連絡などしていない。今は帰国便が出発するまで十時間を切っている。

猛烈な不安が全身を過ぎつた。もしかして乗れないのか。

慌てて航空券や手持ちの案内を見る。国内線には不要である、この予約再確認と呼ばれるものは、近年、アメリカの航空会社は不要の方針を取り始めているが、それも全てではないらしい。心配は増していくばかりだ。

航空会社の電話番号を調べて、電話してみた。通じない。今は草木も眠る深夜だ。営業時間外か。それとも、自分が電話の仕方を間違えているのか。どちらにしろ安心は訪れない。

折角、エジソン・ホテルのフロントに助けてもらって空港近くのホテルを見つけ、高い宿泊料で泊まり、しかも徹夜までしてい

るというのに、それで飛行機に乗れなかったら、自分は阿呆以外の何者でもない。

呆けた顔で眠り続けている幸せそうな友人の寝顔を眺め、自分は成す術もなくシャトルバスの出発時間を待つ。

午前四時三十分、自分は荷物を肩にかけた。これから一人で北米大陸横断旅行に臨む予定の友人はぐっすり寝入っているので、声をかけずに部屋を出た。一人というのは、余計に不安を煽る。

誰もいないロビーで、シャトルバスの出発する五時になるのを待つ。その間、頭の中では、空港での手続きや飛行機に乗れなかった場合の対処法のシミュレーションが何度となく繰り返された。五時五分前に外に出る。駐車されたマイクロバスから黒人の運転手が下りてきて、自分に乗る様に促した。乗客は自分だけだった。

内心、不安が逆巻きつつ、ニューアーク空港に着いた自分は、運転手にチップを手渡し、早速、デルタ航空のカウンターに並ぶ。早朝も早朝だというのに、随分と多くの人々が並んでいる。が、日本人らしき人は一人もいない。冷静さを保たねば、と自分に言い聞かせる。

自分の番が来たので、ニューアーク発とアトランタ発の航空券を渡した。ここで二枚とも手続きが済んで万事OKとなつてほしい。もしも、予約再確認をしていないので、アトランタからの飛行機に乗れないと言われたら、この旅、最大の孤独な戦いが始ま

る事になってしまふ。

固唾を飲んで女性職員の動きを見守る。

「どこへ行くの？」と訊かれて、「日本へ」と答えた。

この先だ。自分は、アトランタで国際線に乗れるのか。

暫くして「荷物は？」と訊かれて、「ない」と答え、肩にかけた

鞆を示して、「これだけ」と補足する。

どうなるのか。自分は、国際線に乗れるのか。

搭乗券を渡された。二枚だ。

アトランタからの国際線も手続きが終了したのだ。

ほっとした。一安心した自分は気分も晴れ晴れ、「ありがとつ」と

と告げてカウンターを離れる。これで何の心配もなくなった。後

は飛行機に乗って、エコノミーの座席に縛り付けられているのを

我慢さえしていれば、機長の気が変になるかテロリストにハイジ

ヤックされるかしない限り、十数時間後には我が日本へと帰還で

きる。

すっかり気楽になった自分は、空港内の売店を物色し始めた。

奥に並んだ雑誌類に目を通す。アカデミー賞附近で映画を特集し

たもの、旅行中にホテルで見たニュースで特集していたモデルの

写真集などだ。写真集は、ただ街中を歩いているだけでも美人だ

らけのアメリカから厳選された女性達だけあって、徹夜の自分の

眠気を吹き飛ばすくらい刺激的だ。ドル紙幣で作った水着を着て

いたりするのは趣味に合わないが。ついつい買いたくなったが、

わざわざ海を飛び越えて来て、グラビア写真集を買って帰るとは

余りに情けなさ過ぎるので止めにした。結局、ニューヨークの地

下鉄路線図とミルキーウェイ・キングサイズを買う。既にニュー

ヨークを離れ、これからアメリカも離れようとする時に、路線図

を買うのも変だが、記念だ。ミルキーウェイは単なる趣味と朝食

用という実益を兼ねていた。

搭乗前の金属探知機で反応されて、靴まで脱がされたもの

の、無事、飛行機に乗り込む。

離陸。残念ながら、外は雨でニューヨークの街並みは見えない。

さよなら、ニューヨーク。

窓からは見渡す限り雲海が広がっていた。まるで雪原の様だ。

元来、雲が好きな自分は、下から見るのとは違った、上から見下

るす一面の雲の素晴らしさを一頻り楽しむ。

そこへスチュワードがやって来たので、迷わず、オレンジジ

ュースを注文した。この旅行で一番、美味しかったのはオレンジジ

ュースだった。飛行機に乗る前、ただでさえしつこい味のミルキ

ーウェイのキングサイズを飲み物なしで食べて口の中が変でもあ

った。

実に満足な気分ですっきりとオレンジジュースを飲み、幻想の雪

の世界を飛んでいるかの様な情景を眺めていると、段々と眠くな

ってくる。一眠りし、飛行機はアトランタへ着いた。

空港内の売店で再びグラビア雑誌に目が行ったり、成田行き飛

行機の搭乗カウンター向かいにあったメキシコ行き飛行機のカウンターに座った青い制服の職員が、若い頃のジョディ・フォスターに似たブルネット美女なのに見惚れたりしつつ、順調に国際線に乗り継ぎ、自分はアトランタを、アメリカ力を発った。

行きは友達と二人だったが、帰りは連れがいない状態で十四時間、エコノミーの狭い空間に耐え続けねばならない。昔、オーストリアへ旅行した時は、帰りの飛行機で隣り合わせた若い女性と話し込んでいるうちに日本に着いた。名古屋出身の彼女は長い髪にデニムのシャツを着た中々の美人で、あまりに嬉しかった自分は成田に着いた後、彼女が国内線に乗り換える所まで送っていき、彼女に笑われたのを覚えている。その後、『彼女と空と白い雲』という如何にも自分には不似合いな題名の短編小説を書き始めたくらい、楽しい体験だった。作品は未だに完成していないが。

あの時と同じ様な事が起きないものかと、隣の席に座る客に期待が膨んだ。結果、両隣とも若い女性だった。

だが、何も起きなかった。

両隣とも非社交的で、自分と話して時間を潰そうとしてくれない。昔と違って、最早、自分が若くないのも一因かもしれない。それに何より、慣れない海外旅行の疲労、徹夜の睡眠不足、予約再確認の心労で、自分は赤の他人の壁を突き崩してまで会話を成立させようとする気力も体力もなかった。

離陸後、すぐに寝る。ひたすら、寝る。飛行中、三回出る食事

のうち、一食を抜かしてまで寝る。わざわざ日本語で話しかけてくれるスチュワーデスに英語で答えてしまったりしながらも寝る。若くて可愛い女の子が隣にいても、それでも何もせずに寝続ける。

着陸までの十四時間強、ただただ眠り続けた。

当然、何も起きなかった。

飛行機は成田空港へ着陸した。

家へと帰る電車を待つ間、自動販売機でポカリスエットのペットボトルを買って喉の渴きを癒す。

自分は違和感に包まれていた。時差ボケや長時間の飛行機のせいかもしれないが、日本にいる自分が不自然に思える。

空港も駅も町の景色も厭になるくらい雑然としている。溢れる広告、立ち並ぶ自動販売機、統一性のない家並みの色と構造。そして、何よりも周りの誰もが日本語を話し、日本人特有の扁平顔だ。今頃、ワシントンDCにいるだろう友人が、かつて東欧旅行から帰ってきて浜崎あゆみの顔を見た時、平べったい顔と異様に大きな目に驚いたと言っていたのに納得する。慣れるまで暫くかかりそうだ。

今回のニューヨーク旅行は、卒業旅行に北米大陸横断をしようと決めた友人が、心細いから誰か付き合っしてほしいと言ったのがきっかけだった。その頃、公私ともに煮詰まっていた自分は、言わば安易に刺激を求めて彼の話に乗ったに過ぎない。

だから、行く前も特別な気持ちの高まりはなく、職場の人から

は、自分が行くのに他人事みたいに話すと云われた。

しかし、帰ってきた今、行って良かったと思う。ニューヨークにいる間も帰ってきてからも、特筆すべきほどの気持ちの高まりはない。それでも、自分は何行って良かったと思っている。もう少しいたかった、もう一度行きたい、そう思うほどに。

社会人になって年齢を重ねていくうちに、半ば必要に迫られてとは言え、妥協と沈黙を重ねて日本的なものに漬かり切って、疲れ切っていた自分の愚考と愚行の数々を、ニューヨークの空気は忘れさせてくれた。幼い頃、この街で植え付けられたとも言える本来の自分が拗って立つ価値観、絶対的基準を再確認させられた気がする。

日本人しかない電車の柔らかい座席で、自分は目を閉じた。

電車の中で居眠りができる。やはり、日本は、いい国だ。

こうして、ニューヨークの徘徊は終わった。